

寶物集卷第四

307  
16

307-16



1200501369384



始



47





虞夏物集卷四



寶物集天第四

第一道心なごうしと出家再世と一併有ると

おつしりはくしに律法の目なり大海の消露

ちがも須弥の寂塵なりとまる空上の花

ほんごと一念の道心の力もくし道心よりた善

徳心なり善徳心なりは大悲心なり千手観音の経

文徳心なりしりまふりなりとあかり方清心なり

しりまふりなりとあかり方清心なり

寶物集

入利がきうぬりて、  
ゆきとかりぬ心、  
をホセてしまし、  
さしとて、  
善徳のぬのかせ、  
とまらるるも、  
たゆのすめ、  
流転、  
改り、  
利を、  
とほ、  
て、  
の、  
こ、  
然、  
十

子









曼珠寺と泉寺は後漢文六出の山と名を合せし事なり  
とくら離らず咸陽より楚頃羽りたりと  
金鳳をりて岩可まのたかる事かとも

兵朝のとはらん人のまうさまうさことかれ  
いけぬえこれまうさうさうさうさうさ  
皇正天皇の新

雅田まうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ

あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ

あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ

あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ

あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ  
あつまうさまうさまうさ

元二六人ニシテ子ニシテありしは、いふに、つらきなり

金葉 今昔物語の事、つらきなりを、つらきなり

二六のちと人へ、つらきなりなり

神皇正統記の神代卷、つらきなり、毎年、二六艘の貢

物、つらきなり、の請文、つらきなり、つらきなり、の、新羅

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、つらきなり、

同院左の初え 乙酉の徳の所 実彦彦彦

東向右の成 匝地園中納を信えん

この成彦彦月より五月まで 百位をうけりて

百三三人カとも 終るる六月なりて 山并大納を直叙

まのん文とも 終ぬ又三三とい終つるまのんをうせ終ぬ

しつては位立位をとのんもともれぬれぬるあふりた

侍守ありしものが 成彦彦度ニとも終るるしつては

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

成彦彦の終るるぬえ 成彦彦の道に終るるぬえ

法皇

小大

しるはたてのまゝはなまのまゝ

あふまゝのまゝ

習成助

法皇

たてまつるまゝのまゝ

伝建法師

まゝのまゝ

まゝのまゝ

法皇

まゝのまゝ

まゝのまゝ

まゝのまゝ

まゝのまゝ

法皇

あふま

法皇

法皇

まゝのまゝ

まゝのまゝ

まゝのまゝ

まゝのまゝ

しやく非情乎本  
美らき子侍——天下の国世うしほこりさうと三  
つん證圖がほもくくさふりて二平の人らるるさ  
なり侍りしは任事の時最良のありまもあつね  
どもかくかく南殿此はるまをそりておひくさ  
おちりてはさうこわさ春の所望のまひる人か  
おひくさうてふらり侍り

清原の伝書

上巻の伝

月詠年

あつてふりてそのいぢりくもつておし

おはし重延のうらる所のいさつと  
ますらかんてりてあつてふらり侍り

おはし重延のうらる所のいさつと  
あつてふりてそのいぢりくもつておし  
あつてふりてそのいぢりくもつておし





よん人の因にありて、  
その人法門にありて、  
兼て、  
兼て、

いも、  
いも、

飛山は、  
飛山は、

結化の、  
結化の、

天稔と、  
天稔と、

一の、  
一の、

か、  
か、

唯高、  
唯高、



くえ給字に...の...  
...  
...

ウケル...  
...

高克...  
...

道心...  
...

法門...  
...

...  
...

右高...  
...

成信...  
...

...

物信...  
...

向心...  
...

て...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

さしりしをまらるひ

山宮に逢ふ人さるり人官に六人女子交りて家六人

大長に三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

さりて三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

山宮の三まの風白左右 疾 さりては海にさしり

たれと申すか... 治つて... 本が

る... の... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

... せ... せ... せ... せ... せ...

わまのついでに...  
かゝり...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...

まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...  
まはる...











信利其者の管... 虎聖殿格の光根  
なり同伴道に... 老列ある...  
衆生は法権... 耶滞のやう... 意の衆生...  
喜望... 金輪聖王...  
縮... 田夫野吏... 結...  
普皆平等... 法... 結...  
善法... 善法...  
わら... 結...  
此所... 結...  
を所... 結...  
心... 衆生...  
の火... 衆生... 信... 行...  
水... 父...  
通... 人...  
の... 衆生...  
の... 衆生...

凡人我輩をばほめてふらんうらやまはなからうとまを  
たすかきとりしされい人けりてふとふいふ  
いふ人わし實達達の昔事こそいふとや大聖菩薩  
此まやれどもさうてくしうるうらやましはなから  
かりまのりながら守りし時出あつてをよるに  
かひ意道あつてをよるに三寶を信じて  
しとてつうこれいふうちのふや大具教王に  
まふんまふんは真実なるはこころに  
期がふりしむりものがうらやまはなからうとまを  
しとてつうこれいふうちのふや大具教王に  
人尊の徳命人尊王子のり人尊王子に  
つたはれは徳命人尊王子のり人尊王子に  
たのりは徳命人尊王子のり人尊王子に  
くしとてつうこれいふうちのふや大具教王に  
たのりは徳命人尊王子のり人尊王子に  
まふんまふんは真実なるはこころに

いふやうなうさしめやうにうささくうささくうささく  
志王子誕生のたのまきもつるわたりかへり  
てまじきお腹痛とつる消陰に女ま子初かのし  
し食もよとのけいごさささかろのしりて  
一因病を治すもよあなりまもわす死のまら  
にさうきれてささめとけいのしりてさしりて  
茂徳とめしんるまきさくさくさくさく  
て病人を照する塚のほらまのあつたるる  
さうさうさうに病をさすくたむしりて大母  
教主の次述ともきかめのもしりて叙王のまきま  
耶夫人のまきさくさくさくさくさくさく  
のつるさくさく誕生のちま池太子とす  
さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
の病もさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
切長とのけいごさのつるさくさくさくさく

一代の王に於ては、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに  
善明太子の轉世の具徳をば、いかに  
りけるか、いかに

一切衆生に於て

一切衆生に於て

一切衆生に於て

一切衆生に於て

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

一切衆生に於て、いかに徳を修め、いかに善を成し、いかに

うたうはたを念からず此れをたがふことの中  
は生のおかしき世のあらきなりたうに  
なりて空の如東晉王の如きもみ行ひて  
此をたがひて生死の苦輪はをわらむのこころ  
是れは世ののりをとほまむてむれかきか  
病をとり薬をすしるものやいふこと  
伽陀をたがひたりものぞよまらぬ  
なまぬはたがひはたがひの  
さうのふむむはたがひはたがひはたがひは  
たがひはたがひはたがひはたがひはたがひ  
さはいのふむむはたがひはたがひはたがひ  
病をたがひはたがひはたがひはたがひは  
たがひはたがひはたがひはたがひはたがひ  
たがひはたがひはたがひはたがひはたがひ  
やまひのふむむはたがひはたがひはたがひ  
はたがひはたがひはたがひはたがひはたがひ

三つありてなりけりこころも人のしつこく況はの  
にしつこくも立てたるあり

大聖觀世音菩薩は慈悲の心は胎の芽を安んずる

此菩薩の善行より身も心も三十三の變りあり

んちのしつこくを六種に別けしは道に群類をす

身は難針女のうきうきよれえんけい今も

かた一人の神志を解しつこのあはれん思を

をもちぬかすことなすことなすことなすこと

こころありてこの心もつこくつこくつこく

性者慈悲 地獄鬼を望 出老痴死苦 以漸を令脱

若我裡頓大悲中 一人不成二世願

我隨座三身悲過中 不遠今覺捨大悲

難度急主 能度相現 悲愛慈生 慈加一子

千手千眼觀世音 大悲心咒 所有者

八面名号 萬靈永 無量壽佛 妙法蓮華







そのまゝと云ふは、  
この世の世帯の人の  
ひより、  
あゝ、

清水を、  
豊後若、  
子、  
念、  
心、

善、  
善、  
ら、  
は、  
信、

信、  
信、  
信、  
信、  
信、

ついで赤人をよむつてあつたれ神天帝...  
昔とかりつゝ結白を自得士のゆゑをいふ  
くれは喜比薩若こらうらうら地獄より  
遠の氷のちうらなは依千威慈悲のほりさくら  
佳契大佳契のほりの中よまを却思守のよ  
まこり始又毎日長朝とくまき千歳といふ  
あこのあつて一初の人をさうさういふ

高人の心算 高人の心算 高人の心算

いふは... 成るの村をこもあつて... 行かた...  
澄とつてはくし 西塔寺 散言は 上...  
こりしつらなけり老き女五子とて...  
こもりたがけこよあの一やけくらあけらあは  
まをいふりしりしじもはらまよとく...  
この女回と二返もらるりけりまをいふ...  
このはくししたもけりまをいふ...  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて



こゝろをよきことにてまじりて  
いふ人々の心もなげき給ふ  
川原の邊に侍りて  
侍君はもろもろの  
事なれどもいけり  
東山よりよき  
地味の子供  
こゝろをよきことにて  
まじりていふ人々の  
心もなげき給ふ  
川原の邊に侍りて  
侍君はもろもろの  
事なれどもいけり  
東山よりよき  
地味の子供  
こゝろをよきことにて  
まじりていふ人々の  
心もなげき給ふ  
川原の邊に侍りて  
侍君はもろもろの  
事なれどもいけり  
東山よりよき  
地味の子供





此のまじりかききまぬんごいし智光のたまはる  
 ぶるくすいりくそて敬善のいりもあらくも其の  
 にあつたゆるむん句つりつりし一度たれし  
 のまじりかきまぬんごいし智光のたまはる  
 たまはるごいし智光のたまはる  
 たまはるごいし智光のたまはる  
 たまはるごいし智光のたまはる  
 たまはるごいし智光のたまはる  
 たまはるごいし智光のたまはる

うしごいし智光のたまはるごいし智光のたまはる  
 つ人まのまらまら所たごいし智光のたまはる  
 此にまじりかきまぬんごいし智光のたまはる  
 信縁のまじりかきまぬんごいし智光のたまはる  
 かうしごいし智光のたまはるごいし智光のたまはる  
 て信縁のまじりかきまぬんごいし智光のたまはる  
 うしごいし智光のたまはるごいし智光のたまはる  
 うしごいし智光のたまはるごいし智光のたまはる







ひんぎんかしのり

ひりし聖徳は雁門のふもあありき毎日

ひりしものよころる赤言をまきかゆりし命終の時

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣

地獄に落ちぬやとていりちあひにありけりし法衣



この文をよめりて一紙の筒に納め、  
業のふとふと人の向きやまをくそんぞら  
ふとくもの一紙をよめりて一紙の筒に納め

儼としていんを舞回録巻全一の巻にありて  
はともこのよりいんを舞回録巻全一の巻にありて  
いんを舞回録巻全一の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
たり龍のふとふと人の向きやまをくそんぞら  
ふとくもの一紙をよめりて一紙の筒に納め

いんを舞回録巻全一の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
あせく指録此の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
素よりいんを舞回録巻全一の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
上人素素の教にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
命の沙汰にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
を記のものにありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
たり神の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて  
なり神の巻にありていんを舞回録巻全一の巻にありて

蘇我の権からんうーとつゝ衣をまきしる  
法所を信長とせし海濱よりありあま主を  
まをんしつは實をこまぬえ主の實を  
た僧の承清かりとつゝん信長君の四徳の實  
かりぬこの結又十善のつゝくつゝは徳を  
の花をまほえうとつゝん余の花のあまやう  
まうんたつゝうれもつゝくつゝんわの善を式を  
あつゝんあつゝんあつゝんあつゝんあつゝん

又行はる言の礎文の言の思  
鳥踏を足踏をうつゝ信長をん  
の信を施すありとつゝ信長をん  
白踏の鳥を靴をんつゝ鳥踏をん  
つゝは昔元竺の國王野回河鳥  
毒虫國王をんつゝ信長をん  
つゝはるんつゝんつゝんつゝん  
つゝはるんつゝんつゝんつゝん

けうきくしはく百島のさうまにかれの僧はかこ  
 しくして是を食るなりしにふれを為し  
 袈裟は給ふのよれ夢をたぬるにすものを  
 給ふ我を袈裟を給ふりこらんてありを  
 里のりすしととり

舍利井尊者の僧二種をのり併合の牛  
 ぬれぬの給くし尊同縁崇の師はすもとの  
 せりくすの給くし師の師の六種をせ  
 つの師をのりしこりぬつては成の僧を  
 言の師はかこしこりぬつては成の僧を

の師をのりの僧をのり師をのりしこりぬつては成の僧を  
 こりぬつては成の僧をのり師をのりしこりぬつては成の僧を  
 師をのりしこりぬつては成の僧をのり師をのりしこりぬつては成の僧を  
 大よみぬつては成の僧をのり師をのりしこりぬつては成の僧を  
 やし大よみぬつては成の僧をのり師をのりしこりぬつては成の僧を  
 にあて外流の師をのり師をのりしこりぬつては成の僧を

か... 老僧... 法所... 普...  
... 百二十年の集...  
... 社...  
... 中... 作... 法... 僧... 三... 十... 年... 集... 普...  
... 社...  
... 中... 作... 法... 僧... 三... 十... 年... 集... 普...  
... 社...

ひ... の...  
... の...  
... の...

いんや三昧を信しけりしとありて  
天竺三昧を信しけりしとありて  
ていふめやりのまじりてありて  
わすれぬるまじりてありて  
ぬる人ありてありてありてありて  
いんや三昧を信しけりしとありて  
は水所ありてありてありてありて  
病をいんや三昧を信しけりしとありて









#### 最明寺藏古鈔本寶物集卷第四解説

寶物集は、平家討伐の陰謀に與して俊寛等と共に鬼界島に流され、後都に歸りて東山の山庄に籠居したりし、平判官康頼入道の作として名高く、平家物語にもその名を傳へ、早くより世に流布したれば、異本の種類も數多く、古鈔本の今に傳はれるものも、曩に本會に於て複製せる宮内省圖書寮御藏の傳康頼自筆本をはじめ、駿河國光長寺所藏の弘安十年書寫本、京都本能寺所藏の室町時代書寫本、身延山所藏の古鈔本など數種あり。今複製する所の最明寺本も亦、此等に伍すべき古鈔本なりとす。

この本は、神奈川縣足柄上郡金田村最明寺の所藏にして、卷第四の零卷一帖を存す。縦九寸餘、横五寸二三分内外の胡蝶裝の冊子にして、厚手の楮紙六葉づゝを重ねて縦に折りたるもの四折を綴ち合せて帖となしたるものにして、木口にて總計四十八張あり。別に表紙を附する事なく、最初の張を以て表紙に宛てたり。第三折と第四折との間の綴目に沿ひて、幅一分ばかりの細長き紙片あり。今は遊離して、之に連続せる紙葉は存せざれども、もと之に連続せる一張、第四折の最後に在りて、裏表紙に宛てられたるが、後に綴目より切れて脱落せるものなるべく推測せらる。

表紙には左上方に

#### 寶物集第四

と墨書せり。本文とは別筆にして、後に加へたるものと見ゆれど、しかも甚しく後世のものにはあらず。表紙裏面の左下の隅に文字あり。もとありたる字を抹り消して上に書けるもの如く、字體不分明にして判讀し難けれど、恐らくは所藏者の名を署せるものなるべし（上の字は「敬」又は「教」の如く、下の字は「達」に似たれども、明かならず）

表紙の次の張より本文あり。その初行に

#### 寶物集卷第四

とありて、次行より本文に入る。この張以下は、紙の上端より三分ほど、下端より四分ほどを隔てて天地に白界を施して、一紙兩面、一面八行に墨書せり。本文最初より數へて第四十六張表面第五行にて本文終り、以下餘白あり。その裏面には戲書あり（「うはのそらにし」「われいてにける」「としのうちにはきはきにけり」「あさかすみ」「年來か開」「としのうち」「月は」「このひと」「あさほの」「見」「ひさかたの」「寶」「ひ□なの」「□や」「辨憲え」などの文字見ゆ。本文とは別筆なれど、かなり古代のものに見えたり。「辨憲」は或は人名か）之に相對する第四十七張は現在の裏表紙にしてその表面にも亦戲書あり（「寶」「波月嶺」などの文字あり）その裏面は白紙にして文字なし。

かくの如く、本文は首尾完けれども、唯第四十四張のみは綴目より幅九分ばかり（表裏各二行）を残して截り去られ、凡十二行ばかりを逸せるものと認めらる。

本文は漢字平假名まじりにして、處々に助詞の類を片假名にて小書せるところあり。又宋にて全文に句讀點と返點とを加へ、漢字の傍に片假名を附して讀方を示せり。歌は行を改めて頭を低くし、時に一行分に二行を書せる處あり。而して肩の處にその出典を注せるもの多し。又、文の中にも、一行より十數行に亙りて行頭を下げて書ける處あり。全文一筆にして、朱書も亦同筆と認めらる。相當の達筆にて漢字平假名共に古體を存し、片假名にも異體のもの少からず（マツワテホエウセネンに丁口チアヲ丑内セ子レを用ひたり）。書寫の年時は明かならざれども、書風字體紙質より觀れば、明かに鎌倉時代のものにして、その末期に屬するもの如し。

寶物集は、嵯峨清涼等に詣でて佛前に參籠したる夜、人々の間にははされたる問答に假托して、人の身にとりて最上の寶は何ぞといふ問題よりして、隱囊、打出小槌よりはじめて、金、玉、子、命など世間の寶の何れも憑み難きを論じ、佛法こそ勝れたる寶なれとて、三寶の尊ぶべく六道の苦惱多きを説き、諸行無常を觀じて佛道に入るべきを勧め、その成佛の道として十二門を擧げて、

人各その心の引かん方を勤めて淨土に往生すべき由を説けるものにして、趣向凡ならず文辭亦見るべく、中世初頭の佛教文學として注目すべきものなり。されば久しく世に行はれて、屢増補改竄を経て種々の異本を生じ、卷数のみより觀ても、一卷本二卷本三卷本七卷本などの種類あり（本朝書籍目録には六卷とあればなほ六卷の本も存せしなるべし）而して、これ等の諸本の種類及び系統に就きては、早く野村八良氏の説あり（鎌倉時代文學新論）、近くは橋純孝氏の「寶物集の異本研究」（雜誌國語國文第二卷第二號乃至第四號所載）及び千葉照源氏の寶物集成立考（國文學踏査第一輯所收）あり、中にも後の二者は、近年見出されたる古鈔本の類をも宏く集めて、諸本の内容を比較検討し、著者の原本の成立並に内容と、後人が之に種々の説話、證文を添加し文章を添削して、諸種の異本を生じたる次第とを仔細に考證せり。然るに最明寺本は未だこれ等の諸論文にも採録せられず、他本との異同、系統上の關係等も未だ攻究せられたる事なきものなるが、この本は、その書寫年代に於て、現存古鈔本中本能寺本よりも更らに古く、傳康頼自筆本及び光長寺本（弘安十年日春書寫）と共に最古の寫本の一に屬し、その内容は、從來知られたる諸本の中にては、片假名古活字本（三卷本）に最近きものの如し。この片假名活字本は原著に多くの増補添削を施したるものにして、特に密宗に關する事項に於て、他本に見えざる特殊の語句及び事實を加へたるものなるが（前掲橋氏の論文参照）、最明寺本はこれ等の點に於て片假名活字本と其の特徴を一にし、兩者の間に密なる關係あるを想はしむ。

されど、この兩本は同一の事實を載せたる處も、その文章に於ては語句に差異あるもの少からず、且つ最明寺本には、支那印度の説話其他を加へたる所甚多く、これ等の諸條は、概して他の何れの本にも見えざる獨特のものなるが如し。而して、活字片假名本も亦少數ながら最明寺本に存せざる語句及び内容を有するを以て觀れば、最明寺本を以て直に活字片假名本の如き本より出でたりとするは聊武斷に過ぐる嫌あり、寧ろ、この兩本は、何れも既に相當の増補改竄を経たる一本より出でて、最明寺本は更に多くの増益を受け、片假名本も亦多少の補訂を経て成りたるものと見るべきもの如し。

最明寺本はその内容の豊富なる點に於て、從來知られたる諸本中分量最多き七卷本（元祿六年刊）に近く、その内容及び語句に於て之と一致し又は類似するもの少からずと雖、これ七卷本が活字片假名本を基とし、之に存せざる諸條を他の種の本より採り來つて増補したるものなるが爲にして、最明寺本が系統上片假名活字本よりも一層七卷本に近きが爲にあらざるは、この三本に共通せる諸條に於て、最明寺本の語句が七卷本よりも片假名本に一致するもの多く（殊に後半に於て著し）又、七卷本に於て新に加へられたる諸條は最明寺本には存せざるを常とするによりても明かなりとす。

最明寺本は零卷にして、その全部の卷数は不明なれども、現存するは第四卷なれば、少くとも五卷以上のものなりし事疑なく、しかしてこの第四卷は片假名活字本其他の三卷本の中卷の後半に相當するを以て想へば、三卷本に増補を加へ、各卷をそれ／＼二卷に分ちて六卷とせしものなるが如く、本朝書籍目録に「寶物集六卷」と見ゆると同一又は同種のものならんか。（之を七卷本と比較するに、この第四卷は、七卷本第三卷の最初より少しく進みたる處よりはじまり第三卷の最後にて終り、その分卷の體裁一致せず。恐らくは七卷本とは直接の關係なきものなるべし）

現に存する古鈔本中、一卷本（傳康頼自筆本）以外の二本、即ち光長寺本及び本能寺本は共に零卷なるが、その内容は片假名活字本に最近くして、更に獨自の増補あり。而して光長寺本（卷第一）は片假名活字本の上卷の前半に當り、本能寺本（卷名未詳）は中卷の前半に當るを以て、橋純孝氏は前掲の論文に於て、これ等の諸本が片假名活字本の如き三卷本より出で、その各卷を各二卷に分ちたる六卷本なりしなるべしと推定せり。この説は根據ありて傾聴すべきものと思はるるが、果して然らば、最明寺本は光長寺本及び本能寺本と略同一の系統に屬するものといふべきなり（現に、本能寺本は、その内容よりすれば最明寺本の直前に續くべきものにして、兩者を合すれば、正に三卷本の中卷の部分に相當す）。而して、これ等の三本は、何れも他本に存せざる獨特の増補を有する點に於ても亦一致すれども、光長寺本及び本能寺本に於ては、その増補が和歌又は和歌に關する事項なるに對して、最明寺本に於ける増補が支那印度の説話其他主として佛典より出でたるものなる點に於て、同一人の手に出でたるものなるを疑はしむるもの無きにあらず。されば、最明寺本を以て光長寺本及び本能寺本と同一の本の零卷と斷定するは早計なれども、これ等の三

本が互に近き關係にありて、共に片假名活字本に近き本より出で、之と同じ系統に屬するものなるは疑無かるべし。

右の如き他本との系統上の關係の問題を離れて最明寺本のみにつきて見るも、同本は寶物集の諸本中、最古きものの一に屬し、しかも多くの増補改修を経て著しく内容の増大せるものにして、かゝる甚しき補修が、鎌倉時代に既に行はれたりしを如實に證明するものといふべく、寶物集のみならず當代及び後代の文學説話等の研究にも資する所あるべし。

なほ、この本は、漢字には殆んどすべて假名を附して讀法を示したれば、全篇假名を以て書かれたるものともいふべく、當時の言語音韻文字假名遣等の研究にも有益なり。「出家」「教主」「惡趣」「俊惠」「魏」「歸」「化身」「蓮花」などの例あり)

この本は、數年前最明寺の加藤俊雄氏が同寺所藏の古鈔本中注目すべきものの一として送り越されたるものなるが、蠹蝕甚しくして披閱する毎に破損する處ありしを以て、容易に披閱し難く、全文を繕讀せしものは今日にいたるまで二三名に過ぎず。今回加藤氏の快諾を得て始めて之を複製し、その全貌を傳ふるを得るに到りしは本會の慶幸とする所なり。

複製するに當り、蠹蝕の小紙片をも收めて一點半畫をも逸せざらしめんと苦心したれども、十分意の如くならざる所あるを免れざりしは遺憾とする所なり。なほ紙幅の都合上、撮影の際少しく縮寫せり。

昭和十四年七月

橋 本 進 吉

307  
持  
16

昭和十四年七月廿五日印刷  
昭和十四年七月廿八日發行 (非賣品)  
發行兼印刷者 古典保存會  
右代表者 東京市下谷區上野區藤公園地  
七 七 條 樓  
印刷所 金屬版印刷所  
東京市神田區花房町五番地  
古典保存會事務所  
電話下谷六七八八番  
總發口座東京四四九四八番

終